

## 兵庫県産昆虫類研究史概説(2)\*

高橋 寿郎

### 欧米人による研究

江戸時代には開国の後はもちろん、鎖国の頃からも外国人で日本の昆虫を採集した人があった。この中でシーボルトが日本へ来た翌年(1824)バタビアで出版された論文で2種の昆虫を記載したのと、ツェンペリーが帰国して後に多数の昆虫を記載したのを除けばすべて単に昆虫を採集して持ち帰り、あるいはそれを送ったものばかりで、ずっと日本に滞留して研究した者はなかった。

それが明治以降になると日本に在留する外国人の中に昆虫採集するものがたくさん出てくるばかりでなく、それを日本にいて研究する人達が現れ、日本の近代昆虫学はまずそれ等の研究家によって発足したのと言ってよい。ツェンペリー、シーボルト以前にドイツ人ケムペル(Engelbert Kaempfer, 1651~1716)が元禄年間(1690~1693)に来朝しており、1727年ロンドンで出版された『日本の歴史』には日本のセミとタマムシの図が出ている。日本産の昆虫で始めて学名の与えられたものはツェンペリーが採集して持ち帰った昆虫を彼自身が発表したものである。

ツェンペリー(カール、ピーター、ツェンペリー、Carl Peter Thunberg, 1743~1828), 1743年11月11日スウェーデン、ヨンキョピンクに生れてウプサラ大学を卒業、東印度会社所属の蘭船に員外科医として乗船阿姆斯特ダムより南アフリカに出発、ケープタウンよりバタビアを経て、1775年8月13日蘭船の主任医官として長崎に入港翌日出島に上陸、1776年3月4日和蘭商館フェイトの侍医として出島を出て江戸に向い、4月27日江戸につき、5月25日江戸を立ち、6月29日出島に戻り、12月3日長崎を出帆、バタビアに向う。帰国後ウプサラ大学教授となり『日本植物誌』『日本動物誌』を出版している(1773年9月22日、スウェーデンでは『はるか遠くへ』と題するすべて1krの5種切手の連刷ペンを発行し、同国の生んだ遠方への旅行者や探検者の功績をたたえたが、このトップにツェンペリーが入っており、日本の風景と植物をバックに肖像が描かれている)。この江戸へ行く時と帰る時、どちらも神戸に立ちよっている。即ち1776年4月6日に長崎より海路兵庫に上陸、8日に西宮を経て大阪に行っており、帰途は同年5月25日江戸を出発、6月15日大阪を出て兵庫を経て瀬戸内海を航行し

ている。この江戸に行く間に採集をしたことは間違いないのだが、産地を一々記録していないので、神戸でどんな虫を得ているのかわからない。ツェンペリーが帰国後45年を経て発表された『日本動物誌』の出版された年(1823)、シーボルトが日本へやってきた。

シーボルト(Philipp Franz von Siebold)が日本に来たのは1823年(文政6年癸未)で出島蘭館の医員としてである。そして文政12年己丑(1829)9月25日所謂シーボルト事件により日本を退去することを命ぜられ且その再渡来を禁じられ、同年12月5日(1829年12月30日)出島を出帆する迄約6年間出島を中心として長崎で動植物採集に努め、安政5年(1858)、日蘭通商条約が成立し安政6年7月6日再び長崎に到着、文久2年(1863)帰欧するまで滞日しその間江戸へも行った。この時彼は兵庫県にも来ている。即ち1826年2月15日水曜日(文政9年丙戌1月9日)オランダ商館長ストウルレルの江戸参府に随行出島を出発、海路3月8日室(兵庫県揖保郡室津)に上陸、それより陸路、龍野、姫路、兵庫(今の神戸)、西宮を経て13日大阪に入り江戸迄行き、帰りは6月19日兵庫より乗船7月7日出島に帰着した。この旅行中室津に上陸して龍野へ向い低い畠地でシラサギを見、龍野でヒバリの歌を聞いたとある。後年有名な『日本動物誌』を発刊したが兵庫県下からの昆虫の記録があった事は認められない。

明治迄にはその他にロシア人ゴオスチエコビッチ(Goschkevitch)及びアルブレヒト(Albrecht)が共に箱館にいて昆虫を採集した。前者は安政5年(1858)に来日、慶応3年(1867)迄いたといわれている。さらに万延元年(1860)来日して1861年から1863年にかけて北海道から九州まで採集したロシア人マキシモヴィッチ(Karl Johann Maximowicz, 1827~1891)がいるが、兵庫に来ているかどうか知らない。

イギリス人ではアダムス(Arthur Adams, 1820~1878)、フォーチュン(Robert Fortune, 1813~1880)の2人がいるが、どちらも兵庫には来ていないようである(フォーチュン、江戸と北京、広川書店、1969年刊参照)。

明治に入って特に神戸、兵庫に関係のある人達、採集、研究をした人達をみてみよう。

\* 兵庫県甲虫相資料, 43. 尚都合により表題を訂正したことを御詫言する。



ただここで御断りしておかなくてはならぬのは昆虫学という学問上からすれば Goschkevitch の採集品に基いて色々日本産昆虫の新種の記載をしたモオツリヨスキイ (Victor Ivanovich de Motschulsky, 1810~1871) の研究は日本の昆虫の研究には欠くことの出来ない重要文献であるがモオツリヨスキイその人は日本に来たことはない。日本の昆虫学の研究にはこのように日本に来た人々の採集品に基いて研究した日本の昆虫学の研究者否日本の昆虫の解明に努められた研究者が多くいることを忘れてはならない (例えば1862年 F. Morawitz は東シベリヤ産のものと北海道産の陸棲歩行虫を記載, 1863年に続報を出している。これ等の材料は函館領事館付の医官 Dr. M. Albrecht 及び Dr. P. Wulffius さらに C. Maximowicz の採集品である)。

イギリス人昆虫学者ルイス (George Lewis, 1839~1926) は維新前後 (1864~1872) に長崎に在留し一旦帰国してから再び来朝し明治13年 (1880) から翌年 (1881) にわたって1年8カ月滞在して主として甲虫類を採集し (前回は長崎を中心に兵庫・大阪と日本の中央部迄を主体に後の来日では関東, 本州北部, 北海道南部を採集), 帰国後彼自身並びに多数の専門家によって多くの研究論文が発表され日本の甲虫類の基礎的研究をした人として絶対見逃せない。兵庫でも採集をしており新種の記載にタイプ標本として兵庫産のものが大変多い。一々調べたら大変な種類になりそうで兵庫の甲虫を専門に学問的に調べた一番始めてのものがこのルイスの採集品によってである (G. Lewis の日本産甲虫類の採集品は Lewis 自身の研究発表以外に次のごときイギリス, ドイツ, フランスの学者によって研究発表がされている。Baly, Bates, Sharp, Waterhouse—*Trans. Ent. Soc. London*, Bates.—*Ann. Mag. Nat. Hist.*, Blandford, Crotch, Gorham, Candéze, Kiesenwetter—*Ber. Entomol. Zeit.*, Reitter—*Verh. Zool. Bot. Ges. Wien.*, Roelofs—*Ann. Soc. Ent. Belg.*, Saunders—*Linn. Journ. Zool.*, Mar-seul—*Ann. Soc. Ent. France*).

プライヤー (Henry James Stovien Pryer, 1850~1888) はイギリス人で明治4年 (1871) 日本に来て死に致るまで約16年在留した。職業は Adamson Bel. & Co. という海上保険会社の書記で主として鱗翅類の採集を日本全国でしている。有名なブランキストと共に鳥の研究もしたりしている。摂津で採集したことが知られている。彼の名は『日本蝶譜』として有名である。この時代には東京外国語学校の教師として明治7年 (1874) 来日したイギリス人フェントン (Fenton) も専ら蝶の採集をしていたが, 兵庫には来ていないようである。(記録によると Jean van Volxem が1873年に日本に来て, 1874年4月20日長崎, 5月3日 nach Hiogo, Osaka,

Kioto, 5月5日 Yokohama と採集をおこないこれ等の結果は Putzeyfs und Roelofs により *Ann. Soc. Ent. Belg.* に発表されているとのことであるが, この文献を見ることが出来なかったので詳しくわからない)。

当時神戸に来て多少でも昆虫を採集したと思われる人はわかっているだけでもさらに次の人達をあげることが出来る。即ちレンツ (Lenz, Tuiscon—イギリス商人, 神戸在留1874~1880, Lenz, T. の採集結果は Harold により2篇の論文によって発表されている。Abhandl. Nat. Ver. Bremen, 1875, 1876), レイン (Rein, Johann Justus, 1835~1918, ドイツ人, ドイツ大使館顧問, 日本在留1874~1875), ジョナス (Jonas, Frederich Maurice, 1851~1924, イギリス人, 煙草製造, 神戸在留, 1882~1903), リーチ (Leech, John Henry, 1862~1900, イギリス人, 鱗翅類採集家, 来日1886), ホランド (Holland, William Jacob. 1848~1932, アメリカ人, 皆既日食観測員, 来日1887), ゼイツ (Seitz, Adalbert, 1860~1938, ドイツ人医師, 来日1891年), フルストルファ (Fruhstorfer, Hans, 1866~1922, ドイツ人, 蝶類採集家, 来日1899年)。

レインはドイツフランクフルトやマールブルグ大学の教授をしていたが, 東京ドイツ大使館の顧問として明治8, 9年の2カ年間日本に滞在し漆器や陶磁器, 製紙等について調査する一方各地を旅行し昆虫の各目にわたる採集に努めておられる。僅か2年の間に235日の採集旅行, 前後6回にわたる日本の本州, 四国, 九州を円念に歩んでいる。その内第1回, 明治8年3月23日より7月28日迄の128日間, 第4回, 明治9年4月1日から5月28日に至る57日間, 第5回, 明治9年6月3日より20日迄の28日間の採集旅行には夫々神戸で採集しており, その内の甲虫類をまとめられたハイデンの論文を見ても記録の中で兵庫産のものが甚に及ぶ50種も記録しており勿論採集時期が神戸の時が一番よかったとしても当時の兵庫の昆虫が豊富であったことがわかる。

余談ではあるが六甲山を今日の姿にする基をつくったのは明治元年 (1866) に来神したイギリスの貿易商, アーサー, ヘスケス, グループであることは良く御存知であろう。現在氏を記念して“前が辻”の高台に碑が立てられている。スエーデンの北氷洋探険船ヴェーガ号がベーリング海を南下して明治12年 (1879) 9月2日横浜に入港, 同号に乗っていた植物学者アトムキストが同号神戸滞在中 (9月14日~9月18日) に六甲山に植物採集をしたという記録があり, 六甲山での初めての採集記録ではないかと思うが昆虫の方の記録は残念ながら知らない。

(以下P. 41へ続く)



クシヒゲシバンムシは県下でここからのみ知られている。

24. ナガシクイムシ科 (Bostrychidae) : 1種(8)。

25. コクヌスト科 (Trogositidae) : 2種(4)。

セダカコクヌストは今の所ここからのみ知られている。

26. カッコウムシ科 (Cleridae) : 3種(14)。

ムナグロナガカッコウムシは県下の他の地では知られていない。キオビナガカッコウムシは多くいる。

27. ジョウカイモドキ科 (Melyridae) : 1種(6)。

28. ケシキスイムシ科 (Nitidulidae) : 20種(61)。

かなり注意して調査したのであるが、まだ不充分のようである。県下でこの地からのみ知られている種が次の9種ある。コクロチビハナノケシキスイ、ハバビロヒラタケシキスイ、ウスモンアカヒラタケシキスイ、キイロヒラタケシキスイ、ドウイロムクゲケシキスイ、マエアカムクゲケシキスイ、*Aethina aeneipennis*、ネアカマルケシキスイ、ヒラムネマルキスイ (この科のものは久松定成先生の同定になるものが多くある)。

29. ヒラタムシ科 (Cucujidae) : 1種(7)。

ヒメヒラタムシは今の所ここからのみ知られているのであるが、調査が不十分な仲間である。

30. ホソヒラタムシ科 (Silvanidae) : 2種(7)。

31. キスイムシ科 (Cryptophagidae) : 6種(12)。

ヒラムネマルキスイ、クロノコムネキスイ、クリイロナガマルキスイの3種ならびに *Serratomaria* 属の1種 (久松先生同定) がこの地からのみ知られている種である。

32. ムクゲキスイムシ科 (Biphyllidae) : 1種(2)。

33. キスイモドキ科 (Byturidae) : 2種(4)。

34. コメツキモドキ科 (Languriidae) : 2種(8)。

ナラコメツキモドキは今の所県下で他に産地を知らない。

35. オオキノコムシ科 (Erotylidae) : 6種(27)。

セグロチビオオキノコムシ、ツマグロチビオオキノコムシの2種はこの地からのみ知られている種である。

36. ヒメハナムシ科 (Phalacridae) : 4種(10)。

ホソヒゲヒメハナムシ、ベニモンアシナガヒメハナムシの2種並びに *Stilbus* 属1種の計3種は県下にこの地からのみ産として知られているが、ベニモンアシナガヒメハナムシは大変多く産する。

37. ミジンムシ科 (Corylophidae) : 2種(3)。

マエキミジンムシは多く産するが県下で他の地からまだ知られていない。

38. テントウムシ科 (Coccinellidae) : 27種(62)。

ムクゲチビテントウ、オオサカヒメテントウ、トビイロヒメテントウの3種はこの地からのみ知られている種である。シロジュウニホシテントウの大変多いことは注目してよい。ニジュウヤホシテントウは扇ノ山での記録はあるが (この記録は一寸疑わしい) この地では今の所まだ得ていない。

39. テントウダマシ科 (Endomychidae) : 4種(15)。

クロモンケブカテントウダマシはこの地からのみ知られている。

40. ミジンムシダマシ科 (Discolomidae) : 2種(2)。

コゲチャミジンムシダマシはここで知られているのみである。 (25-VI-1974) (以下次号)

(以下P. 38から)

このように欧米人による日本の昆虫研究が日本昆虫学の研究の基となってきたと同時に兵庫県産昆虫類の研究もこれら欧米人によってすすめられてきた。明治10年

(1877) 東京大学が発足するに及び生物学科として動物学が発効、それにともなって昆虫の研究も出効した。

(21-III-1974)